

中国延辺朝鮮族の中等教育における日本語教育の展望

韓 秀 蘭

要旨：中国の中等教育における日本語教育は、1972年の日中国交正常化以降、東北三省（遼寧省・吉林省・黒龍江省）と内モンゴル自治区を中心に始められ、現在でも中等教育学習者の90%以上が上記の地域に集中している。同地域は歴史的な影響で日本語を身につけた者が多い一方で、英語教師が不足していたこと、少数民族の大学入試システムによる負担軽減などの理由から日本語教育が盛んな地域である。1970年代後半には、延辺の朝鮮族中学校ではほぼ100%の割合で外国語科目として日本語が選択されていた。

しかし、1990年代に入り、中等教育機関における日本語学習者数は急激に減少していて、延辺における日本語教育は停滞している。一方で、英語学習者数は年々増加していて、現在同地域のほとんどの中学校では外国語の授業は英語しか行われていないのが現状である。

本稿では延辺龍井市の中等教育機関における日本語と英語の学習者に対してアンケート調査を実施し、その結果について分析を行う。同時に70年代、80年代の日本語ブーム時の学習者と比べ学習者や学習環境にどういふ変化が見られたか考察を行う。また、龍井高級中学が2007年に新たな試みとしてスタートさせた日本語ゼロクラスで、一から日本語を習った学生の3年後の大学入試結果についても報告を行う。

1. はじめに

国際交流基金が2009年に行った調査によると中国における日本語学習者数は約83万人で、全体の約71%の59万人が初等・中等・高等教育機関での学習者である。その中で高等教育機関における学習者数が52万人あまりで、最も多く占めている。中等教育における学習者数は約6万人で、中等教育機関は日本語を第1外国語科目として教えている普通校と日本語の専門教育を実施している外国語学校及び職業校に大別できるが、前者は東北三省（黒龍江省・吉林省・遼寧省）と内モンゴル自治区に集中している。本稿では日本語を第1外国語科目として教えている普通校について述べる。

中国における日本語教育は、東北地方の中でも少数民族地域、特に朝鮮族とモンゴル族の間で盛んに行なわれていたことが一つの特徴である。同地域は旧満州地域に当たり、歴史的な影響で日本語を身につけた者が多く、日本語教師が集中していた。1970年代に入ってから英語教師の本格的な養成が始まったが、英語教師の多くは大都市での就職を希望していて、延辺のような辺境地域では常に英語教師が不足していた。また、中国の大学入試システムも同地域における少数民族の日本語学習者数増加の一因である。例えば朝鮮族の場合、漢語の試験と朝鮮語の試験を合わせて一つと見なすため、漢族に比べ一科目多く受験しなければならない。その学習負担を軽減しようと朝鮮族は中学校で外国語科目を選択する際、学びやすい日本語を選択していた。以上のような理由から、1970年代後半には、延辺の朝鮮族中学校ではほぼ100%の割合で外国語科目として日本語が選択されていた。

しかし、1990年代に入り中等教育機関における日本語学習者数は急激な減少傾向にあり、延辺の外国語教育は英語を中心に進められているのが現状である。

本稿では延辺龍井市の中等教育機関における日本語と英語の学習者に対してアンケート調査を実施し、その結果について分析を行う。同時に70年代、80年代の日本語ブーム時の学習者と比べどのような変化が見られたか考察を行う。また、龍井高級中学が2007年から新たに試みた日本語ゼロクラスで、一から日本語を習い始めた学生の大学入試結果についても報告を行う。

2. 外国語学習者に対する調査結果

この調査は2007年の5月と9月に龍井市内の朝鮮族の中学校と高校を対象に、当時大阪大学大学院に在学していた韓秀玉氏と共同で実施したものである。

日本語学習者に対する調査では、龍井高級中学の1年生4人中4人、2年生8人中7人、3年生41人中39人、合計50人から回答が得られた。

英語学習者に対する調査は、龍井高級中学と龍井第一中学のそれぞれ50人の学生を対象に行った。結果、龍井高級中学1年生49人と龍井第一中学3年生42人から回答が得られた。

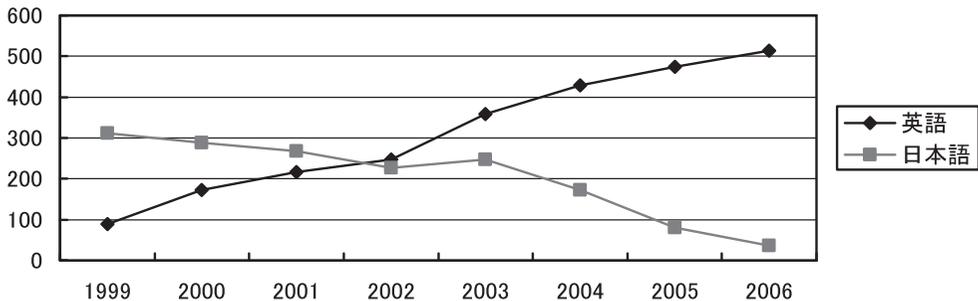
同時に、学習者や学習環境の変化をみるため70年代と80年代の日本語ブーム時の日本語学習者15人を対象に調査を行った。

2.1 外国語学習者数の調査

〈表1〉 龍井市内の中等教育における外国語学習者数の内訳（2007年5月現在）

	龍井高級中学 (高校)			龍井第一中学 (中学高校一貫)						龍井第五中学 (中学校)		
	1年	2年	3年	中学校			高校			1年	2年	3年
				1年	2年	3年	1年	2年	3年			
英語学習者	629	628	665	275	344	355	110	158	186	225	329	338
日本語学習者	4	8	41	0	0	0	0	0	0	0	0	0

龍井市内には計3校の朝鮮族の中学校と高校があるが、中学校で日本語を選択している学生は2校とも0である。龍井高級中学の日本語学習者はいずれも周辺農村の中学校から進学して来ている学生である。その日本語学習者も3年生41人から1年生4人と年々減っていくことが分かる。

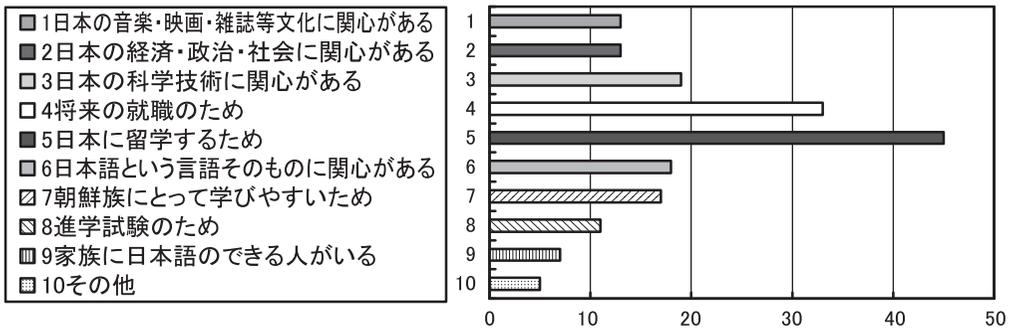


〈図1〉 龍井高級中学の日本語と英語学習者数の推移

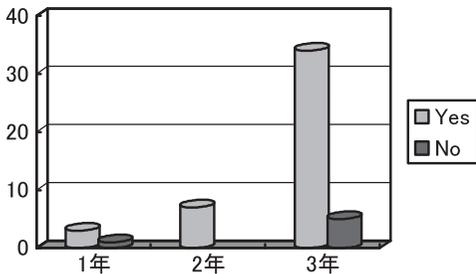
〈図1〉は龍井高級中学の卒業生のうち、1999年から2006年までの日本語学習者数と英語学習者数を調べた結果である。ちなみに延辺の中等教育では70年代までロシア語などの選択肢もあったが、その後は日本語と英語以外の他の外国語の授業は行われていない。〈図1〉を見ると日本語と英語学習者数の変移が一目瞭然である。

1999年の卒業生は402人で、その中で英語学習者が90人、日本語学習者が312人で、日本語学習者は全体の77%を占めていた。その後、日本語学習者数は段々減少していき、2002年を境に英語学習者数が日本語学習者数を上回った。2003年の日本語学習者は、前年より20人多い247人であるが、全体の学生数が前年に比べ増えていたため、日本語学習者数の割合は前年の48%から41%に減少している。2003年に40%を占めていた日本語学習者はその翌年2004年には29%、2005年には15%、2006年の日本語学習者は卒業生540人のうち、わずか37人で7%未満になっている。その反面、英語学習者は1999年の23%から2006年には93%を占めるようになった。

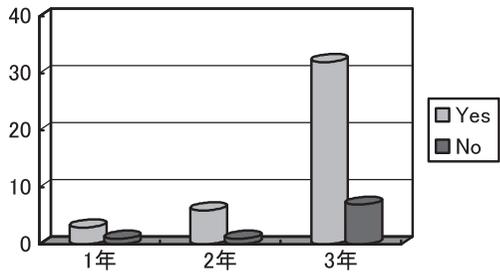
2.2 日本語学習者に対するアンケート調査結果



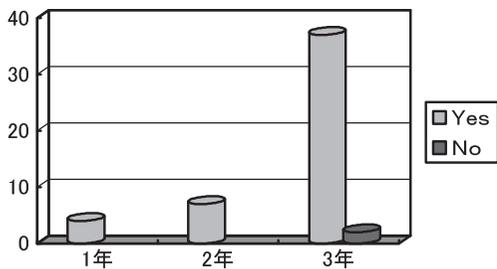
〈図2〉日本語学習者の学習動機



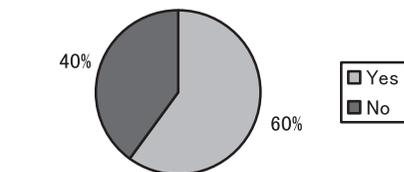
〈図3〉大学日本語学部への進学予定



〈図4〉日本・日本語と関連の職業を希望



〈図5〉日本への留学希望



〈図6〉日本語のできる家族・親族の有無

突出して多い学習動機は「日本に留学するため」と「将来の就職のため」である。次いで「日本の科学技術に関心がある」「日本語という言語そのものに関心がある」「朝鮮族にとって学びやすいため」などが多い。「その他」では「日本の秩序ある社会環境に感動」「異国の友だちと知り合うため」「歴史に関心があるため」などを理由として挙げている。〈図2〉

1年生と2年生はサンプルが少ないため限界があるが、日本語学習者のほぼ全員が日本語学部に進学予定である。その理由として「日本の会社に就職したいため」「より深く日本語と日本の文化について理解したいため」「より高度な日本語を身につけるため」「日本に留学したいため」「日本語学習者数が英語より少なく、かえって就職に有利と思う」などを挙げている。〈図3〉

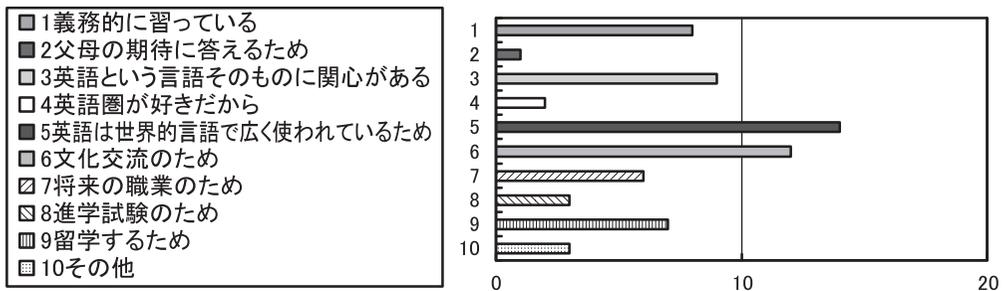
将来、日本・日本語と関連のある職業を希望するかという質問には、50人中41人がYesと答えた。主な職業としては、日本企業の社員、外交官、通訳などである。〈図4〉

日本への留学希望に関する質問には、50人中48人がYesと答えている。日本・日本語と関連のある職業を希望しないと選択した学生も日本留学希望ではYesと答えていて、留学を経てIT企業や医師、弁護士などを希望している。〈図5〉

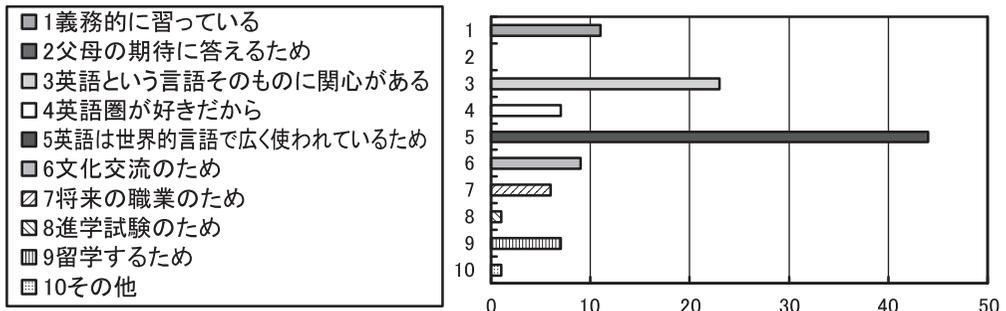
日本語のできる家族がいるかとの問いにYesと答えた学生は一年生4人のうち0人、二年生7人のうち4人、三年生39人のうち26人である。内訳は祖父母9人、親9人、兄弟19人である。〈図6〉

2.3 英語学習者に対するアンケート調査結果

中学生も高校生も一番の学習動機として、「英語は世界的言語で広く使われているため」を挙げている。次いで多い動機は、中学生は「文化交流のため」「英語という言語そのものに関心がある」「義務的に習っている」などが多く、高校生は「英語という言語そのものに関心がある」



〈図7-1〉中学生にみる学習動機



〈図7-2〉高校生にみる学習動機

ある」「義務的に習っている」「文化交流のため」などが多い。〈図7-1、図7-2〉

中学生で大学の日本語学部に進学する予定であると答えた学生は16人、Noと答えた学生は26人である。高校生はYesと答えた学生が27人、Noと答えた学生は22人である。

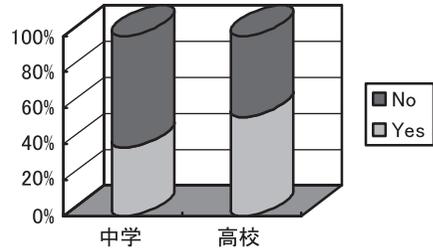
Yesと答えた主な理由は「日本に留学したい」「経済が発展している日本で生活したい」「日本や日本文化に興味がある」「就職に有利だから」の他、「英語ができないため日本語を一から学びたい」という興味深い内容もある。Noと答えた学生は「日本語は使用範囲が狭いため」「日本語は難しい」「日本が嫌いだ」などを挙げている。〈図8〉

中学生で日本への留学を希望している学生は16人で、Noと答えた学生は24人、未記入の学生が2人である。高校生で日本への留学を希望している学生は27人で、Noと答えた学生は22人である。

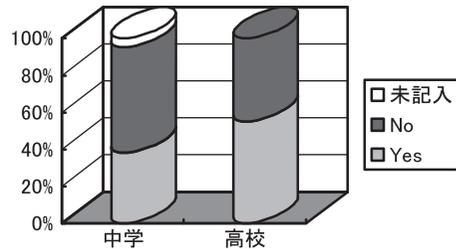
中学生で日本留学を希望した学生は、日本文化、IT技術、工業技術、デザインなどの分野を学びたいと答えている。高校生は、日本文化、IT技術、建築、法律、デザイン、経済、アニメ、医学など多分野にわたっている。〈図9〉

中学生で日本語のできる家族がいるという問いに、Yesと答えた学生は42人中26人で62%ある。内訳は親が18人で、おじ・おばが7人、兄弟・いとこが5人である。

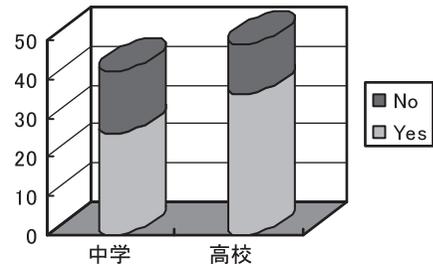
高校生では、Yesと答えた学生が49人中32人で65%ある。内訳は祖父母が15人で、親が18人、おじ・おばが3人、兄弟・いとこが7人である。〈図10〉



〈図8〉 大学日本語学部への進学予定



〈図9〉 日本への留学希望



〈図10〉 日本語のできる家族・親族の有無

2.4 70年代、80年代日本語ブーム時の日本語学習者に対する調査結果

70年代、80年代日本語ブーム時の日本語学習者の調査は15人を対象に行なった。

調査に協力してくれた15人のうち、延辺大学の日本語教師7人と龍井高級中学の日本語教師2人は現在延辺の日本語教育の第一線で活躍している。延辺大学の日本語教師7人は筆者の日本語学部時代の恩師を含め、のちに同僚になった先生方である。龍井高級中学の日本語教師2人には筆者が当校の卒業生ということで色々協力していただいた。

日本語ブーム時の日本語学習者の学習動機や現在の職業、日本留学の有無、日本語を勉強したことへの後悔の有無などを調べることで、学習者の質的变化をみるのがねらいである。

〈表 2〉被調査者の属性（2007年現在）

	性別	年齢	日本語学習機関	日本語学習期間	日本語関連最終学歴	職 業
1	男	57	独学、大学	70年代	博士	大学 日本語教師
2	男	48	大学	1978～1981	大学	高校 日本語教師
3	男	47	大学	1980～1984	大学	大学 日本語教師
4	女	41	中学校～大学	1979～1989	修士	大学 日本語教師
5	男	38	中学校～大学	1983～1994	大学	高校 日本語教師
6	女	37	中学校～大学	1983～1994	修士	大学 日本語教師
7	女	37	中学校～大学	1983～1993	修士	大学 日本語教師
8	女	36	中学校～大学	1985～1996	大学	日本在住 主婦
9	女	35	中学校～大学	1986～1996	博士	日本在住 講師
10	女	34	中学校～大学	1987～1997	修士	日本在住 会社員
11	女	32	中学校～大学	1989～1999	大学	大学 日本語教師
12	女	32	中学校～大学	1989～1999	大学	大学 日本語教師
13	女	38	中学校～高校	1983～1989	×	中学校 歴史教師
14	女	35	中学校～高校	1986～1992	×	大学 中国語教師
15	女	35	中学校～高校	1986～1992	×	中学校 政治教師

〈表 3〉日本語学習開始年にみる主な学習動機

1970年初頭から	日本語の教材があり、日本語のできる人もいたため、独学で学んだ
1978年～1983年	<ul style="list-style-type: none"> ・中日間の交流のために、大学ではじめて日本語を専攻した ・中学校の外国語科目として日本語しかなかった
1983年～1984年	<ul style="list-style-type: none"> ・農村地域の中学校には外国語科目として日本語しかなかった ・成績によるクラス編成によって日本語を選んだ
1985年～1988年	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮族にとって受験に有利だったため ・祖父母や家族に日本語のできる人がいた
1989年～	<ul style="list-style-type: none"> ・日本に留学するため

今回調査に答えた15人のうち、現在延びで日本語教育の第一線で活躍している9人のうち5人が日本留学の経験を持っている。留学経験のあると答えた8人のうち、日本語教師を除いた3人は、現在日本語を活かしながら日本で生活している。

日本語を学習して良かったと答えているのは、年配の40代、50代の日本語教師と、現在日本にいる3人である。30代の比較的若い日本語教師4人は後悔していると答えている。少し後悔していると答えた4人は、主に日本語を高校まで専攻し、現在は日本語と関連のない仕事をしている人である。日本語教師で後悔していると答えている人は、「言語は手段に過ぎず、外国語を専攻しても、活躍できない」「日本語はやはり英語に比べ使用範囲が狭い」などの理由を挙げている。

3. 調査結果分析

2007年現在の日本語学習者の学習動機に関する調査で、突出して多かったのは、「日本に留学するため」と「将来の就職のため」である。また、ほぼ全員が大学の日本語学部に進学を希望していて、日本語をより深く学びたいと答えている。2007年現在の日本語学習者は、「朝鮮族にとって学びやすいため」や「受験のため」に日本語を学んでいるのではなく、大学に進学してから日本語学部に進学し、専門的な日本語を学び、就職や日本への留学など将来的に日本語を活かしていくために日本語を学んでいる。

英語学習者の一番の学習動機は、中学生も高校生も「英語は世界的言語で広く使われているため」を挙げている。また、中学生にも高校生にも、「義務的に習っている」という回答が多数みられるのは、大部分の中等教育機関で日本語教育が行なわれていないため、選択の余地がなくなっていることの結果が反映していると考えられる。興味深いのは、英語学習者の中にも大学の日本語学部に進学したいという人が多く、中学生は42人中38%の16人、高校生は49人中55%の27人も占めていることである。その理由は、「経済が発展している日本で生活したい」「日本や日本文化に興味がある」「一つの外国語でも多く学ぶと、就職に有利だから」などの理由の他に、「英語ができないため、日本語を一から学びたい」という理由もみられた。これは、英語のみを中心に進められてきた教育政策の影の部分といえると同時にこの地域の中高等教育段階における日本語の潜在的な需要を意味していると思われる。

日本への留学を希望しているかという問いに、2007年現在の日本語学習者はほぼ全員がYesと答えていて、より高度な日本語を専攻し、将来的に日本語を活かしたいとしている。日本語学部に進学したいと回答した英語学習者の全員が日本への留学を希望している。英語学習者の中には、日本や日本語に興味を持っている人が多く、日本に留学して学びたい分野もIT技術、工業、経済、アニメ、医学など多分野にわたっている。

70年代、80年代日本語ブーム時の日本語学習者の中には、1970年代に独学で日本語を学習した人が1人いるが、その学習動機は「近くに日本語の教材と日本語のできる人もいたため」となっている。1978年に大学入試の外国語科目として日本語が選択され、1983年までは中学校の外国語科目は日本語しかなく、80年代初頭の学習者の学習動機には日本語しか選べなかったという理由が目立つ。その後、1980年代後半の学習者には、日本の高度な経済発展の影響もあり、日本へ留学したいという学習動機が中心となっている。

2007年現在の外国語学習者に対する調査でも「家族に日本語のできる人がいる」と答えた学生は日本語学習者50人中30人、英語学習者は中学生42人中26人、高校生49人中32人と、その世代は年齢層が若くなっているものの、日本語のできる人がかなり多い。前述したようにこの地域は歴史的な理由から日本語のできる人が多かったため、これも80年代後半までは日本語選択の一因となっていたが、その後段々日本語学習の動機にはならなくなった。

現在中国では日本語学部であっても外国語科目を英語で受験したものを優先的に合格させる傾向がある。大学入試で日本語の受験を認める高等教育機関が少なく、特に重点大学ではその傾向が一層強いといわれている。

4. 中等教育における第2外国語としての展望

国際交流基金の2003年と2009年の調査結果を比較すると、中国の日本語学習者数は約39万人から約83万人に増加している。初等・中等・高等教育機関での学習者はいずれも70%を占めている。その中で高等教育機関における学習者数が最も多く2003年には28万人、2009年には52万人を占める。前述したように、中国の大学の日本語学部では、中等教育で英語を学んできた学生を優先的に合格させ、日本語を一から教えている学校が増えているので、大学における日本語学習者数は増え続けるだろう。また、急速な経済発展に伴い、日系企業の進出が増加していて、社会における日本語の需要も年々高まり、学習者数も増え続けている。一方で中等教育における学習者数は2003年の7万人から2009年には6万人とされ、減少傾向が続いている。

中国教育部は『基礎教育課程改革要綱（試行）（2001年6月）』、『義務教育課程設置実験方案』、『新教育課程標準（新しい学習指導要領）（2005年9月）』を相次いで発表し、大学受験を目指す「受験教育」から生徒の人間性を育て全人格的な教育を行うとする「素質教育」へとカリキュラムを転換した。外国語教育も「素質教育」を全面的に推進するものとして位置づけられるようになった。中等教育段階で開設する外国語科目は英語、日本語、ロシア語などの言語から自由に一つ選択できるとし、外国語学校あるいはその他条件の整った学校では第2外国語課程の設置も可能にすると明確に打ち出した。王他（2011）の報告によると、中国全土に第2外国語設置の動きが広がっているという。

こういう背景の下、龍井高級中学では新たな試みとして2007年度入学者の中から実験的に日本語を一から教えるクラスを設けた。英語学習者の中には、中学校で他の外国語の選択の余地がなく義務的に英語を習っていて、大学では日本語学部に進学したいという学生が多いことはアンケート調査結果からも確認できた。このクラスは英語に自信のないまたは日本語に興味のある学生を中心に編成され最初34人でスタートした。途中留学に行ったり学校を辞めたりした学生を除き、最終的に25人が2010年の大学入試に参加、内21人が見事に大学に現役合格できた。

この21人の高校入試の成績を見ると一番低い学生が317点、一番高い学生が498点、21人の平均点は400点未満である。21人全員成績が悪いというわけではないが、400点未満は低いレベルであることは否めない。しかし、この21人の大学入試での成績をみると、高校入試で平均点500点以上だった学生の成績を超えたり、高校入学時には想像できなかった重点大学への合格者も多くいたり日本語ゼロクラスの大きな可能性を示している。朝鮮族にとって日本語は英語より学びやすい言語で、短時間で成績アップができ、他の教科にも負担をかけずに行われることが可能である。

もう一つ、興味深いことは、21人中高校入試の成績が498点と一番高かった学生は大学の専攻は英語を選択している。当学生は決して高校入試の成績が低く英語に自信がなかったから日本語ゼロクラスに入ったのではなく、高校での3年間しっかり日本語の勉強を行うことが目的だっただろう。大学で第2外国語として日本語を選択すれば自然と英語も日本語も上達することに違いない。

こういう動きは、延辺の中等教育における日本語教育復活の新たなモデルとして、延辺の中等教育における外国語教育に大きな可能性を示唆している。

5. おわりに

日本語の学びやすさが朝鮮族の優勢というだけでは時代遅れである。今は英語ができて当たり前前の時代になっている。延辺でも、中央の英語教育重視政策に基づいて、2001年から小学1年生に英語を教え始めている。しかし、朝鮮族は小学1年から漢語のピンインの勉強を始めるので、同時に英語のアルファベットまで習得することに心配の声も大きい。

小学校から英語を学んだ学生が2007年8月から中学校に入学していて、延辺の中等教育において、益々英語以外の外国語は選択の余地がなくなっている。朝鮮族にとって中学校の段階から漢民族のように日本語を第2外国語として定着させることはその学習負担から考えて難しいところがあるため、中学校で日本語が復活する可能性は低いと思われる。

しかし、龍井高級中学の日本語ゼロクラスの好成績はこれからの延辺の外国語教育に大きなヒントを与えている。英語が必須であることを認識した上で、小学校から中学校まで英語を習ってきた学生に高校で日本語選択の可能性も与え、大学合格までの日本語レベルをつけさせることは可能だと思われる。朝鮮族の優勢を生かし高校で第2外国語としての日本語の地位を確立することで、グローバルな人材育成につながり、朝鮮族の発展につながることになるだろう。

参考文献

- 本田弘之「中国の中等教育機関における日本語教育 — その実態と課題」『杏林大学外国語学部紀要』9号 1997年
- 本田弘之「中国東北地方の少数民族と日本語教育」『杏林大学外国語学部紀要』13号 2001年
- 韓明「中国遼寧省の学校における日本語教育についての研究」『昭和女子大学大学院日本語教育研究紀要』2号 2004年
- 金華「中国東北三省朝鮮族の学校教育と日本語」『日本語教育研究』48号 2005年
- 崔学松「中国東北地域における近代化改革と「日本語ブーム」— 朝鮮族にとっての日本語教育」『一橋論叢』9月号 2005年
- 本田弘之「中国朝鮮族の民族教育とその将来」『杏林大学外国語学部紀要』17号 2005年
- 本田弘之「中国朝鮮族中学における日本語教育の選択メカニズム — 「満州国」後の日本語教育の連続性と非連続性」『杏林大学外国語学部紀要』18号 2006年
- 韓秀玉『延辺朝鮮族地域の中等教育機関における日本語教育の変遷』大阪大学大学院言語文化研究科 修士論文 2008年
- 王崇梁・小長谷友香・佐藤修「中国の中等教育機関における第二外国語としての日本語教育の現状報告」『日本語学』30(2) 2011年